

# 真空地帯

映画文学人生論

原作：野間宏（1952）「河出書房」

監督：山本薩夫『1952』

木谷一等兵 木村功  
曾田一等兵 下元勉  
大住軍曹 西村晃  
安西二等兵 三島耕

脚色：山形雄策

撮影：前田實

音楽：団伊玖磨

おい、四年兵の監獄帰えりのバツチをみせてやるから、そこいたて、たて、たて

野間宏『真空地帯』は中学生のころ、叔父の本棚から盗み読みしたことがある。晦渋な文体の小説で、中学生に読めるような代物ではないが、理解できて、興味をそえられる箇所もところどころにあった。叔父は航空隊予科練帰りの復員兵だったので、おそらくこの小説を読んで当時の兵営生活を思いだしていたのだろう。

真空地帯とは一般社会から隔絶されて、日常的に激しいリンチや制裁が行われる軍隊、この小説では大阪歩兵聯隊歩兵砲中隊の兵営である。

主役は木谷一等兵、準主役は曾田一等兵だが、私にとって気になる人物は学徒動員された初年兵の安西二等兵だった。不器用でへまばかりしてみんなに迷惑をかけていた。彼がへまをすると初年兵全員が連帯責任を問われて、殴られる。

その安西二等兵のぶざまな姿に私は自分の未来を見るような気がした。日本が再軍備に踏み切つて私が動員されたら、まちがいに安西二等兵のようなひどい目にあうだろうと思つたが、幸いにして現実にはそうはならなかった、

それはともかく、原作ではわかりにくい筋も山本薩夫監督の映画を観ると、ほぼわかったような気になる。時は昭和十九年一月、陸軍刑務所で二年三ヶ月の刑を終えた木谷一等兵（木村功）が仮釈放となり、古巣へ戻ってきた。



## 真空地帯

映画文学人生論

班長の 大住軍曹（西村晃）は木谷が前科者ということを黙っていてやると言う。木谷と同期の四年兵は戦地に送られていて、木谷の過去を知っている者は大住以外には誰もいないはずだ。

ところが、初年兵指導係の地野二等兵（佐野浅夫）が木谷を「監獄帰り」と呼びはじめた。「監獄帰りは何もせん。女郎に手紙を書いている」と聞こえよがしに言って、木谷を怒らせた。

木谷は地野を殴りたおした上で、「おい、四年兵の監獄帰りのバッチをみせてやるから、そこいたて、たて、たて」と兵隊全員を並べて次々にピンタをふるった。木谷に好意を寄せる曾田一等兵（下元勉）も容赦なく殴った。

映画ではこの鉄拳制裁の場面が見どころだ。木谷を演じる木村功は気の弱そうなインテリの顔をしているが、誰もさからえない。四年兵というだけで、下士官でもないただの一等兵が全員の兵隊を並べて鉄拳制裁をできるといふ軍隊のシステムは日本独特のものだと思う。

もともと木谷は無実の罪で刑務所に入れられたという。真犯人は別にいたのだが、木谷の言い分は認められなかった。彼は泣きながら、鉄拳制裁をして鬱憤晴らしをするしかなかった。

やがて野戦への転属者が発表され、そのなかに木谷の名前があった。

初年兵齒を食いしぼり冬を待つ